



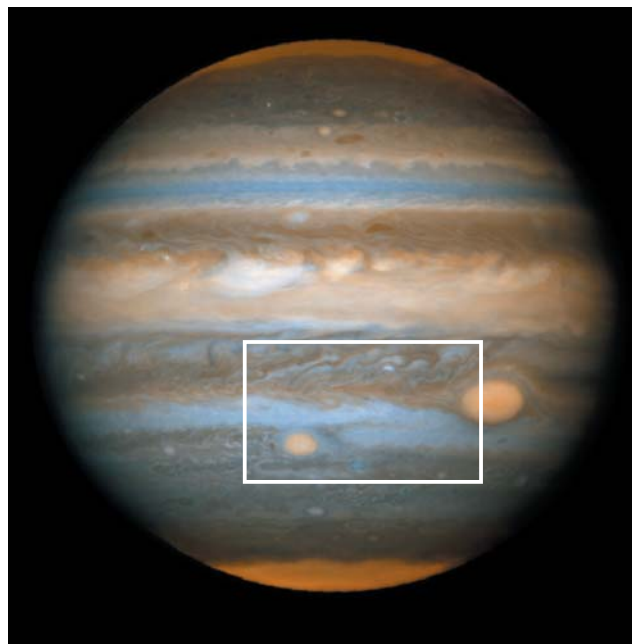
2006年4月にハッブル宇宙望遠鏡の掃天観測用高性能カメラで撮影された2つ目の赤斑（小赤斑）とその近辺の拡大写真。小赤斑の中心に色の薄い雲が少量あることがわかる。右側の大赤斑へと続く雲の乱流の中に、強い対流現象が小赤斑の北側の明るい白い雲として見えている。激しい雷雨とみられる。小赤斑は東へ（右へ）と漂い続け、一方、大赤斑は西へ（左へ）移動するため、両者は2006年7月初めにすれ違うはずだ。

## 木星の2つ目の赤斑を ハッブル宇宙望遠鏡が撮影

木星に出現している2つ目の赤斑のこれまでで最も詳細な画像が、米航空宇宙局（NASA）のハッブル宇宙望遠鏡を使って撮影された。新しい赤斑の直径は、以前からあった大赤斑のおよそ半分、一部の天文学者は「小赤斑」とよぶ。小赤斑の出現は、木星の大気にな大きな気候変動が起こっている可能性のあることと関係しているのかもしれない。

小赤斑は、大赤斑と同じ赤色に変化する前は「白斑BA」とよばれていた。白斑BAは1998年から2000年の間に、3つの白いだ円形の嵐が合流してできた。そのもととなった白斑のうち、少なくとも1つかは2つは90年前から存在していたことがわかっており、3つめの白斑は1939年に出現した。一方、大赤斑は、人類が望遠鏡を手にした400年前から、ずっと木星に存在している。

近赤外線波長で観測すると、小赤斑は大赤斑と同じくらい目立つ。大赤斑は、木星の主たる雲頂から数マイル盛り上がっていると考えられており、小赤斑が目立つのは小赤斑も盛り上がっているからかもしれない。また色が赤いのは、赤斑が木星の大気から物質を吸い上げ、その物質が太陽の紫外線光で化学変化するためだと考える天文学者もいる。



上の写真と同じ頃に撮影された木星の全体像。小赤斑は木星の中心より下の南半球にあり、その大きさは地球と同じくらいだ。